学習院大学新聞

発行所
学習院大学新聞社
〒171-8588東京都豊島区
目白1丁目5番1号
電話 03（3986）0221内線2607
http://www-cc.gakushuin.ac.jp/~press/
press@gakushuin.ac.jp
発行・編集人　原俊太郎
年間500円

紙面紹介

2 大学生と新聞

いつも手の届く所にある新聞。一方、手軽さでネットに魅かれる人が多い。私たちは、新聞との関係を真剣に考えてみた。

3 費用を節約　賢く旅行を

4 トライアスロン　実力発揮し優勝

小休止

昨年12月、スポーツ面の取材同行で筑波大学に行った。もちろん、つくばエクスプレスに乗って。会場に着くまでは軽くピクニック気分。だけど、試合会場のあまりの寒さに終始震えてばかりだった。（椿）

アジア研究教育拠点事業に採択される

東アジア海文明の歴史と環境

昨年8月1日、本学の研究交流プロジェクトが、独立行政法人日本学術振興会「アジア研究教育拠点事業」に採択された。研究期間は4年半である。

「アジア研究教育拠点事業」は、アジアにおける世界的水準の研究拠点の構築を目指した事業である。この事業には、57件もの申請があった。その内訳は、国立大学24機関43件、公立大学1機関1件、私立大学7機関7件、大学共同利用機関法人2機関2件、独立行政法人2機関4件である。そのうち11件がヒヤリングを受け、最終選考により6件が採用された（左図参照）。なお、本学は人文系としても、私立大学としても唯一の採択である。

本学の研究テーマは、「東アジア海文明の歴史と環境」。中国の黄河や長江から発生した文明は、朝鮮半島、日本へと伝わった。そしてそれは、相互の交流を通じて、より高度な文明に昇華されたのである。当研究では、東アジア地域の内海ともいえる海域を「東アジア海」と設定。そこで形成された「東アジア海文明」の特質と自然のかかわりを考えていく。

研究期間は昨年11月24日から平成22年3月31日まで。当プロジェクトは永田学長を実施組織代表、史学科の鶴間教授を日本側コーディネーターに据える。また本学は、協定校である中国の復旦大学と韓国の慶北大学校とともに研究を行う。去る11月27日、百周年記念会館にて催された国際シンポジウム「黄河下流域の生態環境と東アジア海文明」は成功を収め、当研究の進行に弾みをつけた。

今後は、環境とネットワークの2つのセクションに分け、研究調査を進める方針だ。三国共同で黄河下流域の三角州や東アジア沿海の海港を調査する。それらの成果に基づき、日本では中国・韓国の研究者を招いた学術交流セミナーを行う。加えて、中国と韓国でもシンポジウムを開く予定だ。また、参加研究者が情報を共有するため、多言語で同内容のHPとブログを立ち上げる。さらに、研究成果を市民へ発表するために三国の文化財を集めて、日本で「東アジア海文明展」を開催する計画もあるそうだ。共同調査やシンポジウムの準備を現地研究者と綿密に進めるため、東京・上海・大邱にインターオフィスを開設し、若手研究者をインターフェローとして相互派遣することになっている。

平成17年度アジア研究教育拠点事業　採用課題一覧

研究交流課題名	日本側拠点機関・コーディネーター	相手国・地域（拠点機関）
ナノ物質を基盤とする学際科学研究教育拠点の構築	東北大学金属材料研究所 所長・教授　井上明久	韓国（延世大学）
アジア法整備支援のための実務・研究融合型比較法研究拠点	名古屋大学大学院法学研究科 教授　市橋克哉	ベトナム（ハノイ法科大学）
		モンゴル（モンゴル国立大学）
		中国（中国政法大学）
アジアの最先端有機化学	名古屋大学大学院生命農学研究科 教授　磯部稔	中国（中国科学院）
		中国（上海有機化学研究所）
		韓国（韓国科学技術高等研究所）
		タイ（ジュラポン研究所）
		台湾（国立精華大学）
		台湾（国立台湾大学）
日中における薬用植物の育種と標準化および創薬に関する研究教育交流拠点	九州大学大学院薬学研究院 教授　正山征洋	中国（北京大学）
パーム・バイオマス・イニシアティブの創造と発展	九州工業大学大学院生命体工業研究科 教授　白井義人	マレーシア（マレーシアプトラ大学）
東アジア海文明の歴史と環境	学習院大学文学部 教授　鶴間和幸	中国（復旦大学）
		韓国（慶北大学校）

学習院　研究最前線

学問研究の「いま」

今回は、日本語日本文学科の安部清哉教授です。日本語学・方言学を研究されている先生。日本だけでなく世界にまで広げた視点で、言語について語っていただきました。

（取材・構成　山田絵美）

◇　◇　◇

日本語と向き合うきっかけ

先生は、日本語学の中でも特に意味や語彙、方言に興味を持った。「大学入学時は心理学を学びたかったのですが、授業内容の関係で変更し、2年次ドイツ語を専攻しました。その中で、外国語と比較しての日本語の意味やズレに興味が出てきたんです」

言葉の意味を内省するなら母語の方が掘り下げられる。その思いから3年次に日本語日本文学科を専攻した。「演習で平安時代の資料を読んだんです。その時、現代語より意味が分からない古典の方が面白いと感じました」

方言の変化から分かる日本語史

先生は博士課程の時、講座教授の専門である方言学の影響を受けた。そして方言を調べるうちに、日本語の方言の形成が、日本語そのものの成り立ちに関わっていることを知る。こうして興味は、方言の史的解釈である言語地理学や、方言史へと広がっていった。

「アジア言語の中の日本語」

文学部日本語日本文学科　安部清哉教授

日本語のルーツを探る

「昭和30年に、国立国語研究所が60歳代以上に行った全国方言調査があります。例えば、現在ではアサッテの次は『シアサッテ―ヤノアサッテ』の順ですが、この時東日本は『ヤノアサッテ―シアサッテ』の順でした。一方、関西では『シアサッテ―ゴアサッテ』でした。標準語のシアサッテは、伝統的言い方でもあった西の言い方を採用し、東のヤノアサッテは意味を1日ずらしたことを表しています。このように、方言分布から共通語の普及の様子が分かります。今の順序が普及するのは昭和40年以降、テレビの影響です」

日本語の歴史と方言の関係

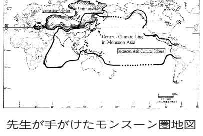
方言分布の成り立ちは未だ不明で、どの方言のどのような特徴が古いかは十分に分かっていない。「方言分布の基本的解釈には、文化の中心の言葉が周囲に広がっていくと考える、柳田国男の『方言周圏論』があります。北の東北と、南の九州や沖縄に共通する現象は古い日本語であるという解釈です。これによって、平面的分布から歴史的な解釈が可能となり、日本語の変遷を辿ることができるのです」

方言境界を調べていくと、文化や地象の境界線まで見えてくるという。「利根川付近を境に、南北で方言が大きく変わります。なぜそこに方言境界があるか調べると、関東平野には6千年前に『奥東京湾』という大きな入り江があり、そこを境界として当時の遺跡分布も異なる。方言にも地形の影響があったことが推定できます。また、1月の平均気温が氷点下になるかどうかでも、日本文化は大きく異なります。このように、方言研究よって新たな文化研究が可能になります」（3月の『学習院大学研究年報』p52参照）

方言と気候の境界の一致は、中国語や朝鮮語にも見られるという。興味深いことに、それらの地域でも南北文化の境界は同じ位置にある。また、気候が共通すると文化の共通性が高くなる、と先生は指摘する。

「アジアから太平洋にかけ、河川名や類別詞の分布が共通します。古い言語史解明によって河川名が重要であることが分かっています。類別詞などの分布範囲はモンスーン・アジア気候であり、共通する文化特徴が20ほど指摘できます。『モンスーン・アジア』の言語の関連を研究していく必要があります。名誉教授の大野晋先生は、日本語のルーツの一つがインド南部のドラヴィダ語であるという説を提唱されました。あまりに遠く、どのように伝わったのか当時解明困難だったため、否定的に受け取られてきた。ですが、インドはアジア・モンスーン文化圏に入っています。日本語と関係する可能性をまだ否定できないと考えています」

類型論など新たな視点から、モンスーン・アジアの言語を研究する必要があると力説する先生。言語学はこのようにして、さらに発展していく。



先生が手がけたモンスーン圏地図

PROFILE

安部清哉（あべ・せいや）

東北大学大学院文学研究科博士課程単位修得。同大学文学部助手の後、フェリス女学院大学助教授、同教授を経て2003年より現職。HP〈http://www.geocities.jp/abeseiya2005/〉

役員改選される

常任委員会

運動部常任委員会、文化系同好会常任委員会が、それぞれ平成18年度役員を改選した。各役員選挙が執り行われたのは、昨年12月2日。任期は平成17年12月3日から平成18年12月2日までの1年間となっている。新役員は以下の通り。

運動部常任委員会

委員長兼運営副局長兼甲南戦実行委員長　佐々木正隆（法3・合気道部）▼副委員長兼学内大会副実行委員長　横川佑治（法3・アメリカンフットボール部）▼副委員長兼会計局長　根本文子（日3・空手道部）▼運営局長兼書記局長　境里枝子（仏3・応援団チアリーダー部）▼渉外局長　胡間悠（史3・陸上競技部）▼編集局長　泉昂太（営3・ゴルフ部）▼保険局長兼情報宣伝局長　井上はるな（心3・トランポリン部）▼学内大会実行委員長兼情報宣伝副局長　竹下廣大（仏3・スキー部）▼四大戦推進局長　前田裕美（仏3・スカッシュ部）

文化部常任委員会

委員長　田中雄大（営2・史学部）▼副委員長　古平あゆみ（法2・生物部）▼会計　三浦昇悟（法1・映画研究部）▼渉外　河原彩子（法1・経済学研究部）▼広報　松岡恵美（政1・美術部）▼企画　平田理沙子（政1・将棋部）

文化系同好会常任委員会

委員長　伯耆（ほうき）健太（法2・コンピュータ研究会）▼副委員長　後藤真沙子（政2・民族舞踊研究会）▼企画　上田千晶（日2・ユースホステル研究会）▼会計　源田修一（法1・地学研究会）▼渉外　岡山彩子（仏1・シェイクスピアドラマソサエティ）▼書記　本田知子（済1・漫画研究会）

ゴルバチョフ氏　若者と未来を語る

昨年11月13日、百周年記念会館正堂にて「国際フォーラム2005『ミハイル・ゴルバチョフ元大統領と若者の集い』一新しい時代と若者の役割一」が開催された。大きな拍手が鳴り響く中、ゴルバチョフ氏が登場。まず氏の講演が行われた。今年75歳を迎える氏は、なんと50年も政治に携わっている。振り返ると、政治活動に参加していた大学生の頃からすでに政治家としての姿があったという。自らの経験をまとめ、学生時代は今後の人生の土台になると語る。そして、あっという間に過ぎゆく若者の時代を生きる私たちに、「若者は時間配分をうまくするとよい」と言葉を残してくれた。

続く質疑応答では、様々な質問が殺到。中でも「リーダーとして大切なことは？」という問いに対するコメントが印象的だ。氏は「高い地位にいることがリーダーなのではなく、変わることができる人間こそがリーダーだ。自分の行いに対しても修正をできる勇気が必要である」と応じている。時にユーモアを交えながら現代の若者の役割について考える、有意義な集いであった。（紫）

平成17年度　国家試験の結果

平成17年度の国家試験における本学学生、及び卒業生の結果が就職部より発表された。今年度も各種の国家試験で合格者を輩出。数字は、昨年11月24日現在のものである。

まず司法試験の合格者は8名。これは卒業生を含む合格者数である。国家Ⅰ種には、卒業生2名を含む4名が合格した。そして国家Ⅱ種の合格者は、卒業生30名を含む54名である。公認会計士の合格者については不明。これは日本公認会計士協会が、今年度より合格者を非公表としたためだ。なお、いずれも男女別の数字は把握していない。また、そのほかの結果については、現在集計中である。

昨年度の合格者は国家Ⅰ種が2名、国家Ⅱ種は44名だった。それに対して、今年度は国家Ⅰ種が2名増、国家Ⅱ種は10名増。合格者は双方とも大幅に増加している。その一方で、司法試験の合格者は、昨年度の10名よりも減少。残念ながら、2年連続の2桁合格という快挙にはあと一歩及ばなかった。

だが、本学の学生数から見ると、今年度も十分評価できる結果であると言えよう。これらの結果を踏まえ就職部は、「国家試験を目指す人は、早くから自分の目標を確立し、勉強に取り組むことが必要です。また、就職部の課外セミナーなどを利用するのも有効でしょう」と、早期の準備の必要性を説いた。

盗難相次ぐ

黎明会館

昨年の大学祭前後、黎明会館内で盗難が相次いで発生した。被害件数は、黎明会館運営委員会（以下、黎運委）が把握しているだけでも2階で6件、3階で2件報告されている。

主な被害は、部室に置いてある楽器類や財布、鞄、部室の鍵などが盗まれるというもの。集合ポストが破壊され、鍵が持ち出された事例もあるが、多くは無施錠の部室で起こったようだ。普段学内に窃盗犯が紛れ込んでいても、見分けることは難しい。特に大学祭は一般の人も学内に出入りする。そのため、犯行が容易になり、被害が拡大した模様だ。犯人が警察に捕まったところもあるが、逮捕できないことが多い。

これを受けて黎運委の田中亮事務局長（日3）は、「使用団体は、短時間であっても部室を空ける際には施錠を徹底してください」と注意を促している。ベランダから侵入されることもあるので、ベランダ戸の閉め忘れにも気をつけたい。

また、「部室のドアに眼張りをしている団体が盗難に遭いやすい傾向にあるので、眼張りはしないでください」と呼びかけている。

鍵の紛失や盗難による鍵の交換の相談は、学生部が受け付けている。集合ポストの番号変更方法は、黎運委に尋ねるといいだろう。

おことわり

今号の「素朴な疑問」は、お休みさせていただきます。次回は5月中旬発行の第204号に掲載予定です。

受賞者発表される

学生の提言

今年度の「学生の提言」の受賞者が決定した。今回応募された論文は6編。その中から優秀賞に輝いたのは、藤本太郎さん（政4）だ。佳作は、高岡恵さん（済3）、町田拓哉さん（法4）、渡辺隼史さん（物3）・石川公美さん（政3）の3編である。

授賞式が行われたのは昨年11月22日。受賞者には、永田学長、遠藤学生部長より賞状及び副賞が授与された。副賞は優秀賞10万円、佳作3万円である。

今年度の論文のテーマは「競争と格差社会」。競争は社会の活力を生む行動原理であるが、必然的に格差を生じさせる。その結果、億単位のお金を動かす人間がいる一方で、大学を出てもフリーターにしかなれない人もいる。日本は「格差社会」に突入したのだろうか。競争が生む格差について、どのように捉えているのかを若い思考に問いたかったという。遠藤学生部長は、「投稿された論文は、どれも学生らしさがにじみ出ており、評論家の意見とは一線を画するものであった」と総評を残した。

明窓浄机

私は人一倍緊張しやすい人間だ。そのため、本番で力を出し切れなかったり、大事なところでミスをしたりする。そのたびに友達や先輩、さらには親にまでも迷惑を掛け、尻拭いをしてもらってきた▼はじめのうちは、きちんと反省し、「次こそは」と気持ちを入れ替えようと努力した。失敗を糧に、自分を成長させようとしていたのだ。しかし、すぐに改善されるわけもなく、私は同じような過ちを繰り返した。そしていつしか、失敗を仕方がないこと、そう割り切るようになっていた▼だが、それはとても無責任なことだろう。今更ながら、自分でも甘かったと感じている。私はいつも何か言い訳を作り、その課題と正面から向き合ってこなかった。つまり、自分の未熟さを認めることを恐れていたのだ▼幸運にも、今まではそれで乗り切ることができた。けれども、いつまでもそんなことではいけない。社会で通用するためには、子どものままではいられないのだ。自分一人で責任をとらなければならなくなる日も近づいている▼自分自身を改革するため、できることは何でもするつもりだ。様々な経験を通して、自らのあがり症を克服したい。大学生とはいえ、遊んでばかりもいられないだろう。今後はそのことを肝に銘じて、日々の生活を送っていくつもりだ。（忠）

情報検索の簡易性、時事を伝える迅速さから、学生が利用するメディアは新聞からネットにシフトしつつある。そこで今号では、新聞の役割をもう一度見直し、どう活用すべきかを探ってみた。

身近にある知の宝庫

～新聞特集～

日本新聞協会に聞く

毎日決まって発行される新聞。だが、新聞というメディアについて、実は私たちはよく知らないのではないか。そこで、社団法人日本新聞協会の平野恭子さんにお話を伺った。

最近、ある新聞社が捏造記事を載せ、批判の嵐にさらされるという出来事があった。それに対して平野さんは、「それは、新聞に対する信頼の裏返しだと思います。信頼は、新聞の命綱であり、100年以上かけて培ってきた資産です」と言う。同協会には紙面審査室というものがある。毎日、全国津々浦々の新聞に目を通し、「新聞倫理綱領」に違反していないかチェックしているそうだ。信頼できること。それこそが新聞の魅力といえよう。インターネットは確かに便利であるが、顔の見えないメディアである。一方新聞は、記者一人ひとりの責任感によって成り立っているのだ。

それ以外にも、新聞にはインターネットにはない特長があると平野さんは言う。「新聞は何でも屋です。新聞を読むだけで、思いがけない知識を得たり、世の中にはこんなこともあるんだと、発見できたりしますよ。自分の関心ある事柄について、自分で掘り下げなければならないインターネットとは、そこが違います」。新聞のよいところは、1部の新聞の中に多種多様な情報が詰め込まれていることだろう。新聞を読んで、社会の片隅で起こった心温まる出来事を発見することもあるのだ。「新聞の役割は、巨悪を暴くというジャーナリズム機能だけではありません。こういった世相だからこそ、新聞をじっくり読んでみることが、私たちの生活に余裕をもたらしてくれますよ」。ちなみに同協会では、「HAPPY NEWS キャンペーン」と題し、読者の心を幸せにした記事を募集しているそうだ。誰でも気軽に、郵送もしくはインターネット上のサイトを通じて応募できる。


新聞についてわかりやすく話してくれた平野さん

さて、前述のような長所を持つ新聞だが、近年インターネットに押され気味だと平野さんは言う。「広告を例にとっても、企業はウェブ上の広告を重視するようになってきています。インターネットは、自分の関心のあることのみを見られるので、対象が絞りやすいんです」。そういう状況に追い込まれている新聞だが、業界は決してインターネットを敵視しているというわけでではないようだ。むしろ新聞と、インターネットの利便性の相乗効果を高めていきたいと話す。「各新聞社のサイトは、無料で閲覧できます。新聞とインターネット上で配信されるニュースをうまく組み合わせ、受け入れてほしいですね」

とはいえ、やはり現在、大学生をはじめとする若者の新聞離れが進んでいるそうだ。「まず、新聞について知ってもらわなければなりません」。そう語る平野さんは、大学生に対し、新聞の読み方についてアドバイスをくれた。「最初の方には難しい記事が多いと思いますが、1面から順に読んでいくようにすると、自然と頭に入ってきますよ。政治面や国際面など、ぜひ学生には読んでほしいと思いますね」。普段、馴染みの薄い分野の記事ほど、読み込んでいくと楽しいのではないかという。「地球の裏側で何が起こっているのかを知るだけでも、面白いと思います。前もって関心領域を決めてしまわずに、色々な種類の情報に接してみた方がよいですよ」

また、新聞は毎日読むことに意味があるのだそうだ。「新聞の特徴は、日付のあるメディアであることです」と、平野さんは強調する。ある話題に関する記事は日々続いているので、毎日読まないと分からなくなってしまう。「新聞を読むのは面倒かもしれませんが、きっと後々役に立ちますよ。楽に情報を得られるメディアの方にばかり、目を向けないでほしいと思いますね」。平野さんは、最後にそう語ってくれた。

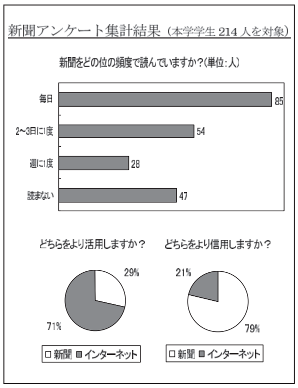
普段私たちが何気なく読んでいる新聞。だがその紙面には、培われてきた信頼への責任が常に垣間見える。

（植木太）

新聞の利用法 実態調査

では、大学生は新聞とどう関わっているのだろうか。そこで本学の学生を対象に、新聞についてのアンケートを実施した。

最初に「新聞をどのくらいの頻度で読んでいるか」という質問をしてみた。若者は新聞離れが進んでいるとされるが、まったく読まない人は意外にも、全体の2割程度と少ない。だが毎日読むという人も4割にとどまり、本学の学生は新聞を読む習慣があまりついていないことがうかがえる。


新聞アンケート集計結果（本学学生214人を対象）

次に「新聞のどの面をよく読むか」という質問では、やはり総合面が最も多く、続いて社会面、スポーツ面という順だった。総合面でとりあえず重要な情報だけを得ておく、という読み方をする人が多いのだろう。一方、政治面、経済面、国際面を読むという回答は少なめな結果に。その中でも政治学科は政治面、経済学科は経済面と、学科によって読む面の傾向が表れていた。

情報媒体としては、ここ数年であまりにも身近な存在となったインターネットも外せない。そこで、新聞とインターネットを比較した質問もしてみた。まず、「新聞とインターネットの情報のどちらをよく活用するか」という質問では、インターネットという答えが7割に。情報を探しやすい、気軽に使えるなどといった理由が多く、インターネットを急速に普及させた原動力もそこにあるのだろう。

続いては、「新聞とインターネットの情報のどちらをより信用するか」という質問。今度は逆に、新聞の方を信用するという答えが8割に上った。「インターネットは無責任に情報を発信している場合が多い」といった意見が多く、情報の信頼性では新聞を挙げる人が圧倒的のようだ。しかし、「どちらも信用できない。新聞であっても、各社によって偏りがある」という慎重な意見もあった。

最後に、「新聞は大学での勉強に役立つか」という質問を投げかけてみた。結果は、「大いに役立つ」「割と役立つ」が合わせて全体の6割で、ある程度は役立つと考える人が多いようだ。レポート作成や就職活動の際には欠かせないといった意見も多く見られた。

全体を通して興味深いのは、より信頼するのは新聞だが、よく活用するのはインターネットだという結果。やはりインターネットには利便性の点で強みがある。だが8割の学生が読むように、新聞もその必要性を失ってはいない。新聞に対する信用を維持するため、各新聞社は質の高い記事を提供し続けることが必要だろう。

（今村隆介）

新聞のよさを教授に聞く

活字という形で情報を伝える新聞と、私たち学生はどのように付き合えばよいのか。政治学科の佐々木毅教授にお話を伺った。

現在、新聞を脅かすメディアとして、インターネットの存在が目立っているが、佐々木教授は次のように語る。「インターネットは大変便利ですが、もたらす情報は断片的なものでしかありません。物事を総合して考える契機となるのは難しいでしょう」。断片的な情報、いわばデータを受け取ることだけが、私たち学生の取るべき道ではないのだそうだ。

佐々木教授は、確かにデータは学問研究にとって命だという。1980年代～90年代にかけ、政治資金について研究していた佐々木教授。その頃、政治資金の実態のデータは、まったく公開されていなかった。


終始熱く語る佐々木教授

「あの時は本当に困りました。まず、資料はデータ化されなければなりません」

そう語る佐々木教授だが、決してデータを盲信してはいけないと警告する。「例えばですが、支持率何%という情報だけでは何にもなりません。データは誰かが作ったものなんです。データを取ろうとするその裏には、メディア側の何らかの意図があります。事実の確実性については、冷静に考えてみなければなりません」。そこで最も必要となるのは、自分で物事を分析できるようになることだという。「その苦労は、インターネットが登場した現代でも変わりません。大切なのは、データに対する問いかけの内容なんです。新聞は、データを基にして『自分が何を問うべきか』ということを考えさせてくれます。活字メディアである新聞を読めば、物を分析する力が養われますよ」

佐々木教授は若い頃、新聞をよく活用したそうだ。「丹念に集めておくと、論文のイメージを作るのに役立ちました。活字の特長は、後で見て反芻することができることですから」。だが、現在の学生は新聞を読まないと感じるそうだ。佐々木教授は、学生のうちに新聞はよく読んでおいた方がよいと忠告する。「新聞を読むということは頭で考えるということです。そういった意味では、学問と重なります」。一方で、世の中の流れを知るためには、テレビニュースを見るという方法もあるが、それは中途半端な方法だという。「テレビのニュースは間延びしていますね。分かった気にさせているだけです。新聞は、広げただけで項目を見せてくれるので、一気に情報を集めることができますよ」

インターネットをはじめとする、ほかのメディアにはない特長を持っている新聞。佐々木教授は、現在新聞4紙を購読しているという。学問を学ぶという点では、佐々木教授と変わらない私たち学生にとっても、新聞は切っても切れない関係に違いない。取材の最後に佐々木教授は、学生に対してメッセージを送ってくれた。「活字メディアを軽視すべきではありません。読む癖をつけるのと同時に、読んで分かって人に説明できるぐらいまでの知識をつけてください」

（植木太）

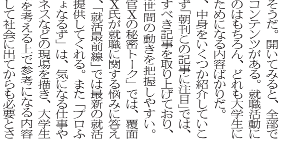
学生をバックアップ

若者の新聞離れが進んでいるといわれる昨今、各新聞社は大学生に向けたサービスを増やす傾向にある。その中でも有名なのが、朝日新聞社の提供する「クラブ・ゼスト」だ。

お笑いコンビのペナルティーが出演するCMでもおなじみの「アスパラクラブ」〈http://aspara.asahi.com〉。無料会員制のサービスで、クラブ・ゼストはその中の一角にある。「大学・就職（クラブ・ゼスト）」という項目がそうだ。開いてみると、全部で14ものコンテンツがある。就職活動に役立つのはもちろん、どれも大学生にとってためになる内容ばかりだ。

では、中身をいくつか紹介していこう。まず「朝刊この記事に注目」では、今注目すべき記事を取り上げており、読めば世間の動きを把握しやすい。

「面接官Xの秘密トーク」では、覆面面接官X氏が就職に関する悩みに答えてくれ、「就活最前線」では最新の就活事情を提供してくれる。また「プロふぇっしょなるず」は、気になる仕事や新ビジネスなどの現場を描き、大学生が将来を考える上で参考になる内容だ。そして社会に出てからも必要とされる英語力。「TOEICで学ぶ英文リーディングの極意」は、その勉強を支援してくれる心強い味方となるだろう。



このような14のコンテンツのほかに、無料の就職セミナーや様々な公開講座が紹介されている。公開講座は有料だが、学生会員は格安の料金で受講可能だ。

あまり新聞を読む習慣がないという人も、まずはこういった大学生向けの記事から気軽に読み始めてはいかがだろうか。

（今村隆介）

記者の眼

受け継がれる感性の行方

落ち葉が舞い、枝だけになった木を見て冬を感じる。桜が咲き、木々に緑が芽吹くのを見て春の訪れに気づく。日本には四季があり、季節に応じた自然を見て、それを風情だと思う感情を人々は持っている。それは古典や短歌、俳句などにも見て取れる、昔ながらの感性だ。これは、日本人が築いてきた独自の美的センスといえる。

しかし現代では、風情を感じる感性が薄らいできているのではないか。この数十年で、都会には高層ビルが次々と建設され、道はアスファルトで固められてしまった。その結果、街中の緑は減り、子どもたちは自然を身近に感じることが少ない。そうしてそこで育った彼らは、風情という感じ方を失いつつあるように思える。それは、こんな環境にしてしまった大人の責任であり、憂慮すべき問題だ。

この問題に対し、子どもたちを少しでも自然に触れさせようと、「自然教室」と銘打って活動する団体も存在する。子どもたちに自然に囲まれた生活を体験させ、豊かな感性を身につけさせることが目的の一つだという。豊かな感性は豊かな人間性を生み出すことにつながる。心にゆとりを持つことができれば、自ずと今まで気づかなかったことも見えるようになるだろう。「風情を感じる」とは、このようなゆとりを持つことで気づける、繊細な感情なのではないか。

もうひとつの風情

もちろん、風情とは自然を見て感じるものだけではない。例えば、庭先で鳴り響く風鈴の音や、縁日の夜店に感じることもある。それらに共通することは、どこかノスタルジックな雰囲気に包まれているという点だ。

近年の世間では、昔を懐かしみ、過ぎ去った時代に美しさを見出す傾向がある。最近では、『Always　三丁目の夕日』という映画が、好調な興行収入を記録した。この映画の舞台は昭和30年代。その時代に子どもだった人々は、今では60代だ。だが、この映画はそれ以外の世代にも広く支持されている。舞台となった時代を実際には生きていない人々の心にも、懐旧の情を抱かせたようだ。それはこの時代に、現代にはないノスタルジックな風情を感じたことも一因だろう。

現代を生きる私たちは、自然や懐かしい雰囲気を持つものに風情を感じている。では、これから数十年経った後はどうだろう。未来の人々は、今と変わらず風情を感じ続けるのか。それとも、言葉自体が死語となり、消え去ってしまうのか。時代が変われば、人の心も変わる。しかし、千年以上の昔から日本人に受け継がれてきた、風情という感じ方は失われなかった。この日本に古くから残る美的センスを、これから先も持ち続けていきたい。現代においても、ふとした瞬間に風情を感じる機会は多くあるだろう。問題は、そのことを意識する人が減りつつあることだ。せっかくの情趣を、美しいと思えなくなるのはもったいない。忘れられつつあるこの感情の大切さを、再認識してほしい。

（政治学科2年　新原大輔）

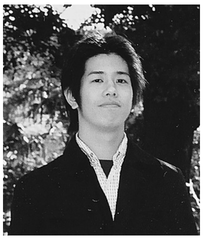
夢模様

Vol.2

法学部政治学科2年

眞子　裕顕さん

人と社会に貢献する存在へ



眞子（まなご）さんの夢は法科大学院に行き、法曹の世界へと進むことだ。「法律を学び、人や社会に大きく貢献できる存在になりたい」。そう語る眞子さんには過去、法曹界を目指すきっかけとなった出来事がある。祖父が酒気帯び運転の車にはねられ、亡くなったのだ。そうして法による正義の実現―その重要性を強く感じるようになった。

現在は本学で夢に向け勉強している眞子さんだが、以前は有名なホテルで調理師として働いた経験を持つ。しかし、任される仕事は雑務ばかり。何の喜びも見出せない毎日だった。そこでの自分の存在は「ちっぽけなネジみたいなもの」だったという。本当に自分がしたいことは何なのか。そう悩んでいた時、祖父の事故が脳裏をよぎった。

思い立って「調理師を辞め、大学で法律を学びたい」と切り出すと、両親は快く後押ししてくれた。一からの受験勉強にはじめはとまどったが、「絶対に這い上がってやる」という強い気持ちで勉強を続け、見事本学に合格。現在サークルでは副委員長を務め、多忙な毎日を送りながらも、人の役に立てることへの喜びを感じている。

「今夢を追えるのも、自分を支え続けてきてくれた両親のおかげ。必ず夢を叶えたい。それが両親への恩返しです」と、彼は力強く語る。その表情には、両親への深い感謝の念と、法曹の夢に対する決意がみなぎっていた。

（取材・構成　今村隆介）

編集後記

これから新聞は、どのような位置付けをされるようになるのか。今回の特集はこの疑問から始まった。

新聞は、夕刊を含めても1日2度しか発行されない。さらに、新聞を読むという行為は、極めて能動的である。情報の高速化が進み、活字離れの深刻な現代、これらは新聞の大きな短所でしかないと思っていた。

しかし、取材を進めていく中で、それらは長所であることを知った。多くの学生の持つ新聞への信用、新聞を読むことにより鍛えられる分析力。これらは活字メディアゆえのものなのだ。一学生として、そして大学新聞の記者として、活字の重要性を再認識することができた。

（植木太）

企画　植木太
構成　原泰一郎
レイアウト　今村隆介

情報特急便

健康診断日程

日時：4月1日（土）
午前・午後　女子　4年生
大学院生
法科大学院
4月3日（月）
午前・午後　男子　4年生
大学院生
法科大学院
4月4日（火）
午前・午後　女子　2・3年生（全学部）
4月5日（水）
午前・午後　男子　2・3年生（全学部）
4月6日（木）
午前・午後　女子　1年生
4月7日（金）
午前・午後　男子　1年生
受付：午前　9時～11時半
午後　13時～15時半
4月5日のみ15時終了
場所：西5号館B1教室に集合

退職教授

平成18年3月31日付で本学を退職される先生方は以下の通り。
フランス文学科　二宮禮子教授

就職関連（3年生対象）

第12回就職セミナー
「面接試験対策セミナー」
日時：2月4日（土）・5日（日）終日
場所：西1号館・西2号館・北1号館
・百周年記念会館
講師：本学OB・OG講師

学内企業・官公庁業務説明会
日時：2月17日（金）～28日（火）
10時～　（土日除く）
場所：西2号館・西5号館

第13回就職セミナー
「就職活動本番に向けて」
日時：2月28日（火）
13時半～（約2時間）
場所：西5号館B1教室
講師：就職部長／外部講師

【お詫びと訂正】

前号（第201号・11月21日発行）の「ミスキャンパス」を取り上げた記事中に誤りがありました。

準ミスに選ばれたのは、「外山已子さん（仏１）」ではなく、正しくは「外山真已子さん（仏２）」でした。

外山さんをはじめとした関係者の方々及び読者の皆様に深くお詫びするとともに、訂正致します。

春休み!!

学生旅行に出かけよう

もうすぐ春休み。今から旅行の計画を立てている人も多いだろう。しかし、大学生には時間があるがお金はない。ここはいっそ、若さと勢いで低予算の旅に飛び出してみてはどうだろうか？

割引手段のあれこれ

旅費を安くする上で、まず思いつくのが行き帰りの交通費の節約だ。新幹線や飛行機を使えば、時間はかからないが、どうしても高くつく。そこで、普通列車や高速バスを利用するというのも、選択肢の一つである。また、節約して旅行を楽しむなら、宿泊先にも気をつけたい。選び方を工夫すれば、ホテルより安く済むケースもある。

交通費比較表(東京～大阪間)	
交通手段	料金
鉄道(新幹線)	13240円
鉄道(青春18きっぷ)	2300円
高速バス(通常料金)	8610円
高速バス(学生割引)	6890円

JRの割引サービス

まずは、JRを利用するケースを見てみよう。JRから発行されている、中でも一番有名なのが「青春18きっぷ」だ。これは、簡単に言えば1日フリー切符のこと。もちろん18歳でなくても、誰でも購入できる。5回分が11500円で売られており、2人以上のグループで利用することも可能。たった1人で5回分使えば、1回当たりの値段は2300円。1回だけの利用でも、通常の乗車券よりは安くなる。

ただ、利用期間は期休暇中のみに限定されている。また、別料金のかかる特急などには使えない。普通列車や快速列車だけの利用となるので、長時間の乗車に耐えられるようでないとオススメできない。

そのほかに、「往復乗車券」の存在も知っておきたい。これは、片道601km以上の場所から、往復切符を買うことで1割引になるというものだ。長距離移動する場合には、これも活用してみてほしい。

割引切符のすべてをここで紹介することはできないが、もう一つ例を挙げておこう。3連休パスはその名の通り、3連休を使った旅行の際に利用できる切符だ。これを使えば、JR東日本全線を、いくつかの路線がフリーパスになる。値段は6000円。一見高くは見えるが、この切符は特急に乗ることもできるというプラス面がある。節約旅行の王道からは外れるが、余裕があれば、選択肢に加えてみてはいかがだろうか。

高速バスという選択

高速バスは鉄道と比較して、乗り換えが不要な点がメリットとして挙げられる。さらに、通常料金が安いので、節約旅行をするにはもってこいだ。

しかし鉄道と比べ、高速バスの割引サービスはまだ一般的ではない。会社によって多少の差はあるが、共通していえるのは、鉄道と同じ往復割引、そして、大学生には使えない。学生には、ほかに学生割引だ。これらを利用すれば、約2～3割の割引となる。

宿泊費を抑えよう

さて、ここまでは交通費を節約する方法を紹介してきた。だがせっかくなら、宿泊施設でもなるべく出費を抑えたい、というのも一つの手だ。そんな人は、ユースホステルに泊まるのも一つのテクニックだ。

ユースホステルとは、ドイツが生まれの「旅の宿」ネットワークのこと。現在、日本国内には約350ヵ所のユースホステルが存在する。1泊3000～4500円程度で泊まれるため、非常に経済的だ。ちなみに、会員になることでさらに宿泊費は安くなる。登録は、日本ユースホステル協会のHPから可能。なお、注意したいのがホテルのサービスだ。一見、ホテルのサービスは高いように思える。しかし、割引サービスを利用すれば意外と安くなるようだ。主な割引サービスとして、記名目特典やクレジットカードの会員割引、ホテルのHPでの割引クーポンなどがある。サービスの種類によって割引額は異なるが、一つのサービスで大体500円、5000円の節約ができるようだ。旅行日程を誰かの誕生日に重なるようにしたり、HPなどを細かくチェックしておけば、お得なことが多い。

また、郷土料理を堪能したい場合は、観光地や駅周辺を避け、街中で食事をする方がよい。観光地によっては、料金が割高になっていることがある。これは、おみやげを買うことにも応用できる。まず、おみやげは最後に買うのが鉄則だ。最初に買うと荷物になるし、もっと安く売っている場所もあるからだ。時には、スーパーで観光地の半額程度で売られていることもある。この方法だと、知らない街を散策もできる。一石二鳥ではないだろうか。

もしも駅周辺などにデパ地下もお足を運んでみよう。デパートは高いのでしか売っていない、という先入観は捨ててほしい。デパ地下では、地域限定の食品や弁当が販売されているだけでなく、試食販売もしている。「ちょっと食べてみたい」程度の物だったら、試食をしに向かうのもいいかもしれない。

節約のメリット

交通費と宿泊費は、旅費の中で大きな比重をしめている。そこを節約することができれば、はかの部分に多くのお金を費やすことができる。ここで紹介した割引を使えば、実質と旅行を満喫することができるはずだ。

（新原大輔）

安くて旨いごはん

食事は旅行の楽しみの一つ。そして旅の印象を決めるともいえる。ここでは、そんな食事面に注目していきたい。

今回のように、安価な旅行を計画する場合、食事に対する考えは大きく分けて2つある。「お金をあまりかけず、かつリッチな食事をしたい」派と、「あまりお金をかけないで食事を普通に食べる」派。

食事に関しては、ホテルのサービスと同じ。まずは、宿泊施設でもなるべく出費を抑えたい、という人もいるだろう。そんな人は、ユースホステルに泊まるのも一つのテクニックだ。

宿泊費を抑えるためにも、この施設は4～8人の相部屋となっている。節約旅行の王道からは外れるが、余裕があれば、選択肢に加えてみてはいかがだろうか。

高速バスという選択

高速バスは鉄道と比較して、乗り換えが不要な点がメリットとして挙げられる。さらに、通常料金が安いので、節約旅行をするにはもってこいだ。

しかし鉄道と比べ、高速バスの割引サービスはまだ一般的ではない。会社によって多少の差はあるが、共通していえるのは、鉄道と同じ往復割引、そして、大学生には使えない。学生には、ほかに学生割引だ。これらを利用すれば、約2～3割の割引となる。

宿泊費を抑えよう

さて、ここまでは交通費を節約する方法を紹介してきた。だがせっかくなら、宿泊施設でもなるべく出費を抑えたい、というのも一つの手だ。そんな人は、ユースホステルに泊まるのも一つのテクニックだ。

ユースホステルとは、ドイツが生まれの「旅の宿」ネットワークのこと。現在、日本国内には約350ヵ所のユースホステルが存在する。1泊3000～4500円程度で泊まれるため、非常に経済的だ。ちなみに、会員になることでさらに宿泊費は安くなる。登録は、日本ユースホステル協会のHPから可能。なお、注意したいのがホテルのサービスだ。一見、ホテルのサービスは高いように思える。しかし、割引サービスを利用すれば意外と安くなるようだ。主な割引サービスとして、記名目特典やクレジットカードの会員割引、ホテルのHPでの割引クーポンなどがある。サービスの種類によって割引額は異なるが、一つのサービスで大体500円、5000円の節約ができるようだ。旅行日程を誰かの誕生日に重なるようにしたり、HPなどを細かくチェックしておけば、お得なことが多い。

また、郷土料理を堪能したい場合は、観光地や駅周辺を避け、街中で食事をする方がよい。観光地によっては、料金が割高になっていることがある。これは、おみやげを買うことにも応用できる。まず、おみやげは最後に買うのが鉄則だ。最初に買うと荷物になるし、もっと安く売っている場所もあるからだ。時には、スーパーで観光地の半額程度で売られていることもある。この方法だと、知らない街を散策もできる。一石二鳥ではないだろうか。

もしも駅周辺などにデパ地下があるのなら、デパ地下に足を運んでみよう。デパートは高いのでしか売っていない、という先入観は捨ててほしい。デパ地下では、地域限定の食品や弁当が販売されているだけでなく、試食販売もしている。「ちょっと食べてみたい」程度の物だったら、試食をしに向かうのもいいかもしれない。

次に、楽しむお金を使わないで旅行をしたい場合、ペットボトルを持参する。まず、自分の物の節約になるのは想像できることではないだろうか。さらに、飲み終わったら水筒代わりにもなるので、宿などでお茶を作って入れていることもできる。

地域感を味わえる安価なご飯といえば、駅とはやっぱりどんがある。関西と関東でタンが違うのは有名だが、はかにも見分けるのに違いがあるようだ。普段はうどん派くらいなのに、カレーライスを食べ、それを原作風味が味わえる。具の違いに興味のある人は、かけてみたいと思わせた。

（掛川千尋）

パック旅行のすゝめ

自分たちでプランを立てると、好みのプランが作れるが、かなり計画するのは難しい。何から手を付ければいいのかわからない人も多いだろう。そんな時に頼りになるのが、旅行代理店である。「人数によって、目的地だけでなく交通手段も異なります」少人数の場合、飛行機を使って、普段行けない九州などの遠方へ移りの旅プランが人気だという。一方、サークルなどの団体は、練習合宿などを目的にしてプランが人気だという。

やり方次第で、食事は安くすませることができる。ここは贅を旅行者の腕の見せ所だ。

（掛川千尋）

杜エアチ・アイ・エアの小林麻里さんら3人に話を伺った。

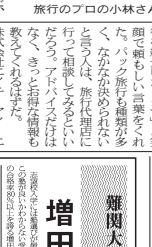
一口にパック旅行と言っても、少人数から団体まで、その対象の幅は広い。それゆえ、それぞれの長所・短所などがあるのだろうか。「人数によって、手段も異なります」と小林さんは答えた。

さらに小林さんは、学生の間に違いがあるという。宿泊施設は自分たちが実技を教えてくれた「実は京都より大阪の方がホテルが同じ料金の場ものが、ビジネスホテルの方が安い」という方次第で個性を出すことができるのだ。

さらに小林さんは、学生のうちに、行事期間中に少し寄くなるという。

最後に小林さんは、「目的や条件を相談してくだされば、ぴったりのパック旅行を紹介いたします」と笑顔で締めくくった。

パックが旅行も種類が多くて、家族向けのパック旅行なら、ファミリーパックもあるようだ。パックを選ぶ際、「パック旅行でも、やり方次第で個性を出すことができる。



旅行のプロの小林さん

旅立ちの一夜～夜行バス体験記～

深夜の東京駅。夜行バス乗り場の前、人々の姿は様々だ。老若婦、出張のサラリーマン、それ以外国人観光客。誰もがバスでの旅を心待ちにしているように見える。

発車時刻の10分前、バスがやってきた。2階建ての大きな車両で、トイレの脇に飲み物のコーナーもあるようだ。座席はすべて指定席で、縦3列になっている。前後左右の間隔がスキマ取られているので、背もたれを倒し、足を伸ばしてゆったりとできる。

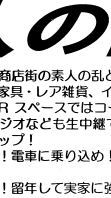
ドアのアナウンスが流れ、バスは静かに走り出す。発車してしばらくは、一般道を走るため、どこか落ち着かない。だが、高速道路に乗り、車内が消灯される頃、マン、それ以外国人観光客。

途中、サービスエリアで休憩、深夜の駐車場は、仮眠を取るために入ったトラックばかりだ。昼間に賑わうあるかりは、ショッピングを下ろし、自動販売機だけが働いている。

車内アナウンスに気づいて目覚めると、いつの間にか車内の明りが点いていた。間もなく到着するようだ。バスはすでに高速道路を降り、街中を走っている。

駅前に降りつつ。始発にはまだ遠い時間。当てもなく、荷物を預けるお店、はやる気持ちを抑える。旅はまだ始まったばかりだ。

（小倉正也）



CAMPUS GUIDE

●音楽愛好会
「音楽愛好会3月定期ライブ」
日時：2月26日（土）
場所：富士見ホール
料金：無料
内容：ライブをします。

●観光事業部部
「スキー&スノボツアー」
日時：2月26日（土）～28日（火）
場所：Mt. Naeba
料金：24300円
内容：密閉外の方も自由に参加できます。スキー・スノボ初体験の方も歓迎します。

●音楽部
「音楽部卒業演奏会」
日時：2月27日（月）
場所：百周年記念会館
料金：無料
内容：クラシックコンサートです。4年生の有終の美を飾ります。

●ライングハウス
「3月定期演奏会」
日時：3月上旬
場所：富士見ホール
料金：無料
内容：何が起こるか分からない……。

取材・構成
小倉　正也
掛川　千尋
新原　大輔
山田　絵美

好奇心を失わない生活を

今回は、外国語教育研究センターのローラ・マクレガー助教授にお話していただきました。

音楽からの転機

5歳からずっとピアノやチェロを弾いていて、大学も地元カナダのトロント大学の音楽科に入りました。そして、大学で学んだ音楽理論に興味を持ち、卒業後は「ニューヨークの大学院に進学したんです。しかし、そこは非常にレベルの高い学校で、また、当時のアメリカの物価はカナダよりも高く、精神的にも経済的にも苦しい生活でしたね。ですから、留学する時には学校のレベルだけでなく、楽しい思い出を作れる場所がとうから検討すべきだと思います。

大学院の修士課程を終えてから、博士課程に進むまでには、1年間の猶予期間がありました。その時、音楽の勉強とは関係なく、英語圏以外の国に行きたいと思い、日本エアシスタントイングリッシュシティーチャーの仕事に挑戦しました。場所は北海道の田舎の中学校。最初は不安だったのですが、結果から言うと最高の1年間でしたね。日本の文化や習慣、料理の作り方も学ました。当時の友達とは今でも連絡しています。人のつながりの多い田舎だからこそできた経験だったと思います。結局、ずっと日本に住みたいと決心し、博士課程の進学はやめました。それまで20ヵ国学んできた音楽の勉強を諦めることになりましたが、私の心は日本のことでいっぱいで、後悔はありませんでした。

現在のマクレガー助教授

旅で広がる視界

高校時代、家族でカナダ全土を8週間かけてキャンプの旅をしたんです。ゆっくり時間をかけて色々なところを回ったことで、かけがえのない経験ができました。学生の皆さんも、日本国内でもいいので、旅をたくさんしていただきたいです。自分の国の文化を学び、好奇心を忘れないために。また、視野を広げ、悔いのない大学生活を送ってください。

（取材・構成　小倉正也）

PROFILE

1989年アメリカ・ロチェスター大学院卒業後、渡日。上智大学英語学科講師を経て、02年より、本学外国語教育研究センター助教授。

あの頃 私も若かった⑨

外国語教育研究センター
MARCGREGOR,Laura助教授

映画

家の鍵

監督　ジャンニ・アメリオ
出演　キム・ロッシ・スチュアート／アンドレア・ロッシ／シャーロット・ランプリング
2004年／イタリア／111分
配給　サジフィルムズ

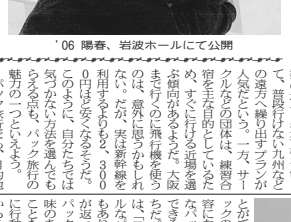
父と息子。それはあまりにありふれていて、ごく自然な関係。だが、この映画に登場する2人は、どこにでもいるような親子ではない。

父であるジャンニ（キム・ロッシ・スチュアート）は、15年前に恋人を難産で亡くしている。その際、障害を持って生まれてきた息子パオロ（アンドレア・ロッシ）をも、恋人を失ったショックから手放してしまう。15年という空白の後、息子の育ての親に、パオロをミュンヘンからベルリンのリハビリ施設に送り届けるよう頼まれる。初めて会う息子に、どう接すればいいのか戸惑うジャンニ。そして送り届けた先で、彼は1組の母娘と出会う。障害のある娘を持つ母親ニコール（シャーロット・ランプリング）は、自ら心に闇を抱えつつも、ジャンニとパオロを温かく見守る。そして彼女とのかかわりの中で、ジャンニは様々な影響を受けていくことになるのだった。そんな時、あるきっかけからジャンニとパオロはノルウェーへと旅をすることになる。旅を通じて少しずつ、だが確実に二人の心は近づいていくように見えたのだが……。

パオロを演じたアンドレア・ロッシは、実際に障害を持つ少年である。その彼が、驚くほどの自然な演技を見せたことこの映画がより素晴らしい作品になったといえるだろう。ジャンニ役のキム・ロッシ・スチュアートとの会話シーンはどこかぎこちなく、15年という空白の時間の重みを感じさせる。表面上は明るく振舞いつつも、心の中には寂しさを抱えたパオロを演じる彼の演技に注目してほしい。

この作品のタイトルである「家の鍵」は、映画を読み解くためのキーワードにもなっている。劇中でパオロがジャンニに、住んでいる家の鍵を見せるシーンがある。この「家の鍵」がどんな意味を持っているのか。それを考えながら観てみるも面白いだろう。

（新原大輔）



'06 陽春、岩波ホールにて公開

難関大学合格の失敗しない塾選び

増田塾に聞く

栄光をその手に掴み取る

トライアスロン同好会

無尽蔵の体力底知れず

ゴールを目指し、果てしない道のりを突き進む加藤選手

昨年の11月20日、茨城県潮来市にて日本学生デュアスロン選手権が行われた。本学からは男子7人、女子3人が出場。その中で、加藤雅彦選手（政4）が2位、松島玲奈選手（政4）が1位という素晴らしい成績を収めた。特に松島選手は2位に大差をつけての圧勝。その身体能力の高さをまざまざと見せつけた。

デュアスロンという競技はトライアスロンとは異なり、ラン、バイク、ランの順で競われる。泳ぐ必要のないこの競技で、加藤選手の力は最大限に発揮される。なぜなら、加藤選手は走ることに特化した練習を繰り返してきたからだ。

ところがレースの2週間前、加藤選手はアキレス腱を痛めてしまう。「昨年、この大会では3位だったので、それよりも上位を狙っていました。それだけに足の怪我は不安材料になっていましたね」

調子は最悪だった。プレッシャーも重くのしかかる。いつも通りに足を動かすこともできない。だが、そんなことを感じさせない好調なスタートを切った。

満足な走りもままならない状況でも、加藤選手は冷静に周りの様子をうかがい、ペース配分をする。第1ランを3位で抜けると、ランの後でとにかく辛かったというバイクを迎えた。

十分に練習もできなかったため、体力不足を招くもここで離されたら終わりだと、必死でペダルを漕ぐ。確実に体を蝕んでいく30㎞の道のり。それでも加藤選手は決して速度をゆるめなかった。

42分間、先頭集団にがむしゃらに喰らいつき、最後のランへ。しかしこの時、足の痛みはすでにピークに達していた。さらにはスタミナも尽きかけていた加藤選手だったが、己の精神力のみを頼りに力走。今までトレーニングしてきたことが支えとなり、体を突き動かす。貪欲に走り続けた結果、前大会の順位から一つ上げての2位と、試合前の目標を見事に達成した。

にもかかわらず、「悔しいです」と顔をしかめる加藤選手。納得のいくレースとはいかなかったようだ。そんな自分に厳しい加藤選手だが、最後には「次回は1位を取りたいです」と前向きに話してくれた。

一方の松島選手には、世界大会にも出場しているという意地がある。「絶対勝てると思っていました」と、心には余裕があった。彼女は今大会の出場選手の中でも、トップクラスの実力を持っている。序盤で独走することもできたが、ドラフティングレースのことを考え、東海大の選手と2人で並走することにした。

2人でほぼ同時に第1ランを走破し、次のバイクに臨んだ。多少出遅れたものの即座に巻き返す。そこからは激しいデッドヒートを展開。相手が前で走り、風よけになったことも幸いしてバイクで大きな疲労感は残らなかった。対する相手は大幅に足を消耗していた。それに気づいた松島選手は、最後のランで勝負を賭ける。力強いストライドで差を広げると、そのまま一気にゴール。

終わってみれば3分差をつけての快勝で、自信に裏打ちされた実力を十二分に証明してみせた。松島選手は「勝ててよかったです。今年最後の大会を有終の美で飾ることができて安心しています」と、試合後に笑顔で語ってくれた。

これから加藤選手は、一般のデュアスロン選手権で勝ち上がり、チャンピオンシップを目指す。松島選手は今年2月に開催される、過酷なアイアンマンレースに出場する予定だ。真のトライアスロン選手を目指し、彼らはまだまだ走り続ける。　（山崎晃志）

上智大封じ、初戦突破

サッカー部

2点目のゴールを決め、仲間と喜ぶ篠選手（中央）

昨年の12月10日、立正大学サッカー場において、新人大会2回戦、対上智大戦が行われた。本学は昨秋のリーグ戦で1部昇格を達成。現在も成長中のチームである。優勝への想いを胸に秘め、選手たちはピッチに立った。

本学は開始直後から、激しい攻撃で上智大のディフェンスを突破しようとする。しかし、相手も伸び盛りのチーム、本学のすばやい動きにも、すぐさま対応してきた。

川上雅大選手（物2）のシュートは、惜しくも枠の外に。さらに、鈴木圭介選手（営1）のフリーキックも相手GKに阻まれる。シュートまで運ぶものの、なかなか得点には結びつかなかった。

互いに譲らない攻防が続いたが、試合の転機は前半20分に訪れた。センタリングからゴール前にボールがこぼれたところを、中上正朗選手（法1）が蹴り込む。相手は必死にクリアを試みるが、ボールはゴールラインを割る。本学は待望の先制点を挙げた。

こうなると、流れは一気に本学へ。FW陣が精力的に攻めていく。持ち前の強烈なシュートで何度も相手を脅かした。また守備では、キャプテンの佐藤龍備選手（営2）を中心にディフェンスラインを固め、相手の動きを封じる。この後、得点を奪うことはできなかったが、終始本学ペースのまま、前半を1－0で折り返した。

後半も緊迫した試合展開となり、両者の競り合いは一層激しさを増していく。なんとか追加点が欲しい本学は、緻密なパスで相手を翻弄し、揺さぶりを掛けていった。

そんな中、後半39分にチャンスが到来する。ゴール前に走りこんだ篠達也選手（済1）へスルーパスがつながった。篠選手はチームメイトが見守る中、落ち着いてシュート。ボールはGKの横をすり抜け、ゴールネットを揺らした。その瞬間、イレブンの喜びは頂点に達する。この2点目により、試合を決定づけた。

本学はその後もひたすら攻めの姿勢を崩さない。試合終了のその時まで油断することはなかった。スコアは2－0、苦しみながらもトーナメント初戦を白星で飾った。

「思ったより苦戦しました。この内容では力が出し切れたとは言えませんね」と佐藤選手。厳しいコメントとともに、悔いの残る表情がにじみ出ていた。

この勝利によって、1部の力を見せつけたサッカー部。だが、今後は数々の強豪と戦っていかなければならない。彼らの栄光への挑戦はまだまだこれからだ。　（佐藤貴裕）

DEBUT

剣道部女子主将

木村　麻里さん（営３）

頼れるチームの柱へ

剣道部女子の中心選手である木村さんは、本学が四大学定期戦で10連覇を達成する大きな原動力となった。団体戦で先鋒を務めるなど、チームを勢いづける存在だ。

そんな木村さんは、1年生の12月に行われた団体の新人戦でデビュー。彼女は中学時代から竹刀を振り続けていたが、それでもデビュー戦には独特の雰囲気があったようだ。周りの選手を見てすっかり萎縮してしまったという。

そんな状態で迎えた1回戦。戦局的にも精神的にも余裕のある状況で、木村さんの出番がやってくる。しかし、練習試合の経験もなかった彼女は緊張からか、思うように体を動かすことができない。平常心を取り戻せないまま、試合は終わってしまう。結局、勝利に貢献することはできなかった。

続く2回戦でも、彼女は実力を発揮することができなかった。相手にペースを握られたまま試合は進み、隙が生じたその刹那に一本を献上。さらには、普段なら対処できるところを、まったく同じ攻撃で二本目も奪われてしまった。こうして木村さんのデビュー戦は、よいところなく幕を下ろした。

この試合で彼女は、緊張感がある場面でも、それを乗り越えなければならないということを痛感。それからというもの、皆の期待に応えられなかった悔しさをバネに、日々稽古に励んだ。

そうして過ごすうちに、試合に対する意欲が湧いてくる。いつしか「絶対にレギュラーになる」と決意。次第に練習にも身が入り出す。すると、2年生の5月には部内戦を勝ち抜き、見事に個人戦の出場権をその手に掴んだ。

そして今では、結果を問わず自分の納得のいく試合ができるようになっている。それは、彼女が成長したことの証だろう。

昨年の11月に主将となった木村さんは、「すべての定期戦に勝って、部員全員で喜びを分かち合いたいです」と抱負を語ってくれた。歴代の先輩たちがなしえなかったことを実現させようと奮闘中。剣道部の未来をその双肩に背負った彼女の新たなる挑戦が始まる。　（山崎晃志）

学び多き敗戦

アーチェリー部

去る12月11日、筑波大学アーチェリー場にて、日玉筑学新人戦が行われた。各大学の1年生のみが出場するこの大会。指がかじかむほどの寒さの中、彼らは戦い続けた。

今大会は、50mと30mから1人それぞれ36射、合計72射の総得点を人数分で平均した結果で争われる。そのため、序盤からチーム全体で得点を伸ばした日体大が独走態勢に入った。そうなると、本学の相手は残る2校。つまり、玉川大と筑波大に絞られた。

しかし、本学は前半から出遅れる。選手たちは時おり高得点を出すものの、肝心の安定感がない。個々人のスコアにムラがあり、なかなか波に乗れなかった。

そんな状況下でも、庄内隆一選手（政1）は集中を切らさない。彼の目はただ一点に向けられていた。そして放たれる力強い矢。そのまっすぐに伸びた軌跡は、確実に的の中心をとらえていく。そんな庄内選手の活躍により、3大学の勝負は熱を帯びていった。

的を見据え、集中する庄内選手

試合も終盤に入り、少しのミスも許されなくなる。会場が緊迫した空気に包まれ、選手一人ひとりの顔にも緊張が見え始めた。

だが、選手たちへの声援がそれをかき消す。応援に支えられた彼らは、着実に調子を上げていく。それでも出だしのミスが響いたのか、筑波大を上回ったものの、玉川大には競り負けてしまった。

「開始直後は固く、みんな実力が出ていなかった」と分析する永島和之主将（物3）。精神面での課題が浮き彫りになった形だ。

この試合は3位に終わったが、全員まだまだ発展途上。これから一戦ごとに成長していくに違いない。いつの日か、一回り大きくなった彼らに会えることを期待したい。　（嶋先伸人）

有終の美、叶わず

アイスホッケー部

敵陣深く攻め込む鈴木選手（中央）

秋季3部リーグは、昨年の12月7日、東伏見アイスアリーナにて最終戦を迎えた。6位の本学は首位の立教大と対戦し、3－7で惜敗した。

第1ピリオド、本学は開始早々に先制点を許す。一瞬の隙を突かれた失点だった。これでペースを乱されたのか、緩急をつけた相手の攻撃に苦戦し、さらに2点を連取される。それでも徐々に相手の守備が崩れ始めた。その限られた好機をものにしようと、本学は積極的にシュートを狙う。しかし、立教大の堅い守りにことごとく阻まれた。

3点差を追うという厳しい展開の中、本学の悪い流れを坂本太樹選手（政2）が打ち破った。古澤寛選手（政4）がつないだパックを、坂本選手が落ち着いて決め、貴重な1点をもぎ取る。だが終了間際、追加点を奪われ、結局点差を埋められなかった。

追い打ちをかけるように、第2ピリオドの序盤にも1点を失い、本学は劣勢に立たされる。向かい風にあおられ、本学は無理に攻撃を仕掛けてしまった。相手にくさびを打ち込もうとするが、逆にカウンターを浴び、痛恨の失点。その後、本学は挽回を試みるも、攻撃は空振りに終わった。

第3ピリオドもすぐに得点され、本学主導の戦いができない。ところが時間が経つにつれ状況は一変。立教大の動きが鈍くなっていく。それに比べ、後半に強い本学は確実に氷上を支配し始めた。

日向野孝仁選手（営1）のパスから、鈴木翔太選手（営1）が相手の守備をかいくぐり、1点を奪取。さらに、古澤選手も左サイドからゴールを入れる。この2点で差を詰めたが、最後はうまく逃げ切られ、本学は目の前で優勝を決められてしまった。

「現役最後の試合で勝てなかったのは本当に悔しい」と、増山喬之主将（政4）は試合後、このように語った。この一戦で4年生は引退し、今年からは新体制で臨むことになる。春季リーグで新生チームは、どのような活躍を見せてくれるのだろうか。　（石崎知世子）

TOPICS

その他の試合結果

【ホッケー部男子】▼秋季ホッケーリーグ戦▽対明治大0－7▽対東京大0－2

【ホッケー部女子】▼秋季ホッケーリーグ戦▽1勝4敗　7位

【弓道部男子】▼入替戦▽対専修大　負け

【ラグビー部】▼対抗戦Bグループ▽対成城大22－14▽対東京大37－21▽対一橋大34－7

【アメリカンフットボール部】▼リーグ戦▽対神奈川大30－13

【ソフトボール部男子】▼選手権大会▽2回戦敗退▼入替戦▽対東京大　勝ち　1部昇格

【ソフトボール部女子】▼関東大会▽対千葉大4－0▽日体大0－11

【少林寺拳法部】▼全日本学生大会▽予選敗退

【ダイビング部】▼フリッパー競技会▽男子1位　女子3位　総合1位

【ソフトテニス部男子】▼秋季首都リーグ▽2勝1敗

【卓球部男子】▼甲南戦▽2－5　負け

【卓球部女子】▼甲南戦▽4－3　勝ち

【ボウリング同好会】▼秋季個人メジャーリーグ戦▽岡嶋佑樹　1勝5敗　関東4位▼秋季レギュラーリーグ戦▽対東海大2－1　2部リーグ優勝

デスクの片隅

毎回、新聞を作る期間になると、日常の雑事が疎かになってしまう。部屋の片付けや料理、果ては講義にまで支障をきたすこともある▼原因は理解している。一つには、複数の事柄に同時に集中できないという私自身の性格によるもの。もう一つは、いつアイディアが浮かぶか分からないという、創作活動の難しさによるものだ▼文章を書くとき、より適切な表現を求めて何度も推敲する。しかし、どうしても的確な言葉が思いつかないという場合が多い。その時、言葉は出てこないが、より当てはまる言い回しがあることだけは何となく分かる。この「何となく」という感覚を頼りに日々、文章を書き直す。その作業に気をとられてしまい、普段ならば何でもない些細なことに、困難を覚えてしまうのだ▼けれど、そのような自分を認めた上で、今年はその感覚を前向きに受け止めたい。不安感を、よりよいものが生まれる予感として捉えられるように。私はこの新しい1年を、そうなれるよう意識して過ごしていきたい。　（泰）